

同定依頼

する側とされる側がやるべきこと



渡辺 恭平

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

自己紹介

渡辺恭平（わたなべ きょうへい）

- 神奈川県立生命の星・地球博物館の学芸員
- 昆虫の分類学者
- 専門は寄生蜂（特にヒメバチ科）の分類学
- 幼少時からずっと生き物好き

遍歴：クワガタムシ→淡水魚→チョウ→カミキリムシ
→ゴミムシ→ハチ

最近は愛好家が少ない分類群ばかり集めている



同定依頼の必要性

- 生物多様性の調査においては、なるべく多くの分類群を対象とし、正確な種名が報告されることが望ましい
- 昆虫をはじめ、多くの分類群では、**全てを一人で同定することは不可能**



専門家への同定依頼

★される側の状況や注意すべきこと

★する側が注意すべきこと

十分に知られていない!!!

いち分類学者の同定依頼対応の実例

渡辺が専門とするヒメバチ科の特徴

- ① 体が比較的大型で、良く採れる
- ② 農林業害虫の重要な天敵
- ③ 生態系の調整者（生態学の対象）
- ④ **カッコ良い**
- ⑤ 同定資料が少ない
- ⑥ 同定に実体顕微鏡が必須
- ⑦ ハイアマチュアがほとんどいない



ウェブサイトでは情報発信



同定依頼が多い

いち分類学者の同定依頼対応の実例

- この冬には約6000頭の標本が届く
→ 愛好家、博物館、国の研究機関など



毎年3000～6000頭程度の寄生蜂の同定依頼が来る
(市民から来る一般の昆虫の同定依頼を除く)

同定依頼の対応に必要なこと

- 時間と設備のほか、手元の標本や文献、ノートやデータも最大限活用
- 既存の文献にない知識や経験が“もの”をいう



分類学者にとっての同定依頼の位置づけ

- 社会的貢献となるが、本業ではない
→ 同定作業は主に時間外に実施
- 標本を見る眼が鍛えられる
- 標本や分布情報が集まる
- 人との繋がりや共同研究のきっかけ
→ 分類学者の信頼度を計る指標の1つ
- 普及的著作に繋がる（ニーズの把握）



分類学者にとって良いことばかりなのか？

同定依頼をされる側（分類学者）が困る事例

- スケジュールを無視した同定依頼
- 協力することが前提の同定依頼
- 状態の悪い（カビや虫害）標本の送付
- ギチギチに標本が詰まったの標本箱の送付
- 標本になっていないサンプルの送付
- 写真のみの気軽な同定依頼
- 膨大な同定結果の指定された表への記入
- 同定者へのインセンティブの欠落

同定依頼を「する側」と「される側」に、
それぞれ配慮が必要

同定依頼を「する側」が配慮すべきこと

1) 同定依頼をする人に時間に余裕をもって相談する

- 依頼者の協力を前提とした調査・研究計画を立てない
→ 無理に調査の対象を広げすぎない
- 期限、謝礼、著者や謝辞への追加など、必ず事前に相談しておく
- 同定結果をどのような形式で受け取るか、決めておく

2) きちんとした標本作成の技術を身につける

- 標本作成は依頼者のすべき作業
- 写真で同定できない分類群があることを認識すべき

3) 同定された標本は要望に応じて公共機関か同定者に寄贈する

- 歴史的にも同定依頼のマナーの一つ
→ もちろん、研究終了後の寄贈でも良い
- 標本が社会で最大限活用されるように配慮する

同定依頼を「する側」が困る事例

- いつまでたっても結果が戻ってこない
 - 標本の作り方などがわからない（紹介されていない）
 - 標本を提供する意義がわからない
- 専門家が同定した証拠標本を探しても見つからない

同定依頼を「される側」が配慮すべきこと

- 同定依頼を何でも引き受けず、塩漬けにもしない
- 引き受ける条件、期限をきちんと決め、可能な限り期限を守る
- 適切な標本作成法の紹介を行う
 - 提供希望の標本の内訳を依頼者に伝える
(全標本が寄贈される場合は別)
 - ちゃんとした同定ラベルをつけ、公的機関に収蔵する

同定ラベルの重要性

- 同定ラベルをつけない分類学者が意外に多い
→ 同定ラベルを必ずつける
- 種名しかない同定ラベルもかなり多い
→ 同定者名と同定年を必ず書く

【Ichneumoninae: Phaeogenini】
Herpestomus
brunnicornis スガヤドリ
(Gravenhorst, 1829) ヒメバチ
Det. Kyohei WATANABE 2019

Exetastes
albimarginalis

Exetastes ♀
albimarginalis
Watanabe, 2020
Det. Kyohei WATANABE 2021

カナブン
Det. Kyohei WATANABE 2021

ヒロカオ ♀
クロハナアブ
Det. Kyohei WATANABE 2021



(おまけ①) 同定能力を高めるには

同定依頼を「される側」

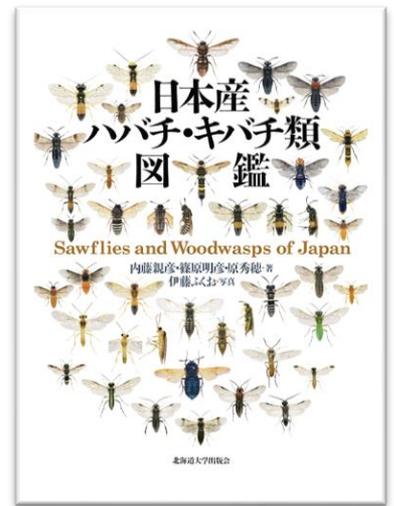
- 同定ができる分類群を近縁なグループにも広げてゆく
- 数を効率よくこなせるシステムを作る

同定依頼を「する側」

- 初心者は比較的解明度が高い分類群を選ぶ
- 参照標本と国内外の文献を集める
- 形態用語を理解する
- 文献の情報を整理し、**ノートを作り**、検索表等を自作してみる
 - 系統関係を反映した検索表が最善とは限らない
 - 地域別に作ると楽になることがある



(おまけ②) ハチの同定



出版社HPより画像引用

- 双眼実体顕微鏡とマイクロメーターがほぼ必須
- いずれも参照標本があると良い

ハバチ、キバチ類

- 日本産ハバチ・キバチ類図鑑（内藤ら, 2020）が出ているが、スギナハバチ属やキモンハバチ属など、良く得られる分類群でも不明種が存在し、それらは検索表等に含まれていないので注意が必要
- 翅は腹部の上に重ねておかない

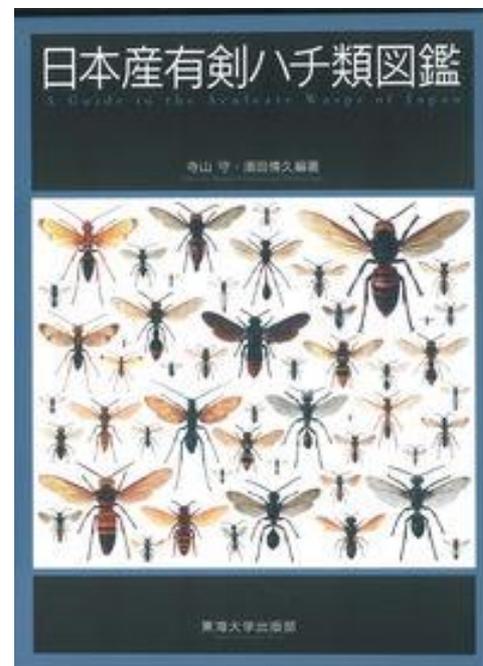
寄生蜂類

- アシブトコバチ、シリアゲコバチ、セダカヤセバチ、カギバラバチ等ごく一部を除き包括的な日本産種の同定資料はない
- 既存の図鑑類はごく顕著な種を除き、同定にはほとんど使えない
- 現在ヒメバチ上科の属までの検索表を準備中

(おまけ②) ハチの同定

カリバチ類

- 日本産有剣ハチ類図鑑（寺山・須田編, 2016）が出ているが、複数の分類群で検索表等に間違いがある
- 解説や他の文献を活用し、慎重に同定すべき
- 常木勝次氏の書いた蜂類同定手引など、他の文献と併せての同定が望ましいが、入手しにくいのが難点
- 大顎を良く見るので、必ず開いておく



(おまけ②) ハチの同定

ハナバチ類

- 日本産ハナバチ図鑑（多田内・村尾編, 2014）が出ているが、多くの分類群で検索表等がないため図鑑単体での同定は困難
- 最近出版された同定の手引き（渡辺・長瀬, 2022）と併わせて同定すると良い
- 標本の状態が同定の成否に大きく影響する
- 大顎を開いておく

